

64 『解馬新書』の骨学用語について

松尾 信一

現在の『家畜解剖学用語』(哺乳類)は『解剖学用語』(人体)との関連で制定されているので、共通の用語が多い。

江戸後期の『解馬新書』(一八五二年)は『解体新書』や『医範提綱』などの人体解剖書を参考にしており、内臓の用語などを採用している。

しかしながら、『解馬新書』の骨学用語について調べてみると、腓骨(大腿骨)の一語だけが『解体新書』の用語と同じで、他は全部異なっている。他の人体解剖関係では、「人身連骨真形図」の尾骶(骨)、髌骨、脛骨の三語が共通であった。

『解馬新書』には全身骨格図(左側)があり、各骨に骨名が記してある(以下括弧の中は現代用語を記す)。

項鎖骨(環椎からの頸椎七個)、枕子骨(第一胸椎)、髻甲骨(第二胸椎)、脊梁骨(胸椎と腰椎)、接脊骨(仙骨)、尾骶骨(尾椎)、柵子骨(腰椎横突起)、臆子骨(胸骨)、肋扇骨(真肋)、辺骨(仮肋)、膊骨(肩甲骨)、槍風骨(上腕骨)、肘骨(橈骨)、膝蓋骨(手根骨)、脛骨(第三中手骨)、子骨(第一指骨)、柱蹄骨(第二指骨)、蹄胎骨(第三指骨)、三山骨(腸骨仙結節)、臀骨(坐骨)、腓骨(大腿骨)、機骨(脛骨)、驚鼻骨(踵骨)、骭骨(第三中足骨)、附骨(第四中足骨)、後肢肢端は前肢と同名。頭骨について、上齶、下齶とも現在の上顎骨も下顎骨に一致しない。鼻筒、鼻膈、鼻素、鼻梁などは現在の鼻骨の一部。脳骨(頭頂骨)、眼骨(眼窩を構成する骨)、前歯(切歯)、驛牙(犬歯)、齧(臼歯)。

これらの骨名の源流について調べてみた。中国書では『司牧安驥集』齊の阜昌五年(一一三五)に重刊、現存の最古のものは明の弘治十七年(一五〇四)、『元亨療馬集』明の万曆三十六年(一六〇八)、『図像馬経全書』明の天啓四年(一六二四)などの書に記してある。朝鮮書では『新編集成馬医方・牛医方』李朝の定朝の定宗元年(一三九九)、

日本での複製本の原本は万曆八年(一五八〇)にもある。しかしながら、これらの書には、本文中に骨名を記したり、全身の輪郭の外形図に骨名を記してあるだけで、骨を图示しているものは存在しなかった。

一方、わが国の「馬の図」〔蓬左文庫の寛文末から元文のころ(一六七二—一七四〇)〕、『解馬骨格内景図』〔馬事文化財団、文化四年(二八〇七)〕、『古今要覧稿』馬の部、文政四—天保十三年(一八二—一四二)には、馬の全身骨格図や各個の骨を图示して、骨名を明示してある。以上の中では、「古今要覧稿」の稿本(内閣文庫)が最も詳しい資料であった。これらの図は、西洋の馬体解剖学の影響を受けていないものである。

江戸時代で、西洋の馬体解剖学の影響を受けた、最初の骨格図は『相馬略』慶応三年(一八六七)にある。骨名は日本名(漢字)と片仮名のオランダ語名で記してある。それらは、額骨(前頭骨)、眼窩、額骨(頭頂骨)、後頭骨、顛顛骨(側頭骨)、鼻骨、淚骨、軛骨(頬骨)、大前顎骨(上顎骨)、牙骨(切歯骨・家畜に存在)、後顎(下顎骨)、頰骨(頸椎)、第一椎(環椎)、第二椎(軸椎)、脊椎(胸椎)、腰

椎、十字骨(仙骨)、尾椎、真肋、仮肋、胸骨、肩胛、上臂骨(上腕骨)、前臂骨(前腕骨)、肘骨(尺骨)、手根骨、鉤骨(副手根骨)、管骨(第三中手骨)、接骨(小中手骨)、子骨(種子骨)、甲骨(第一指骨)、冠骨(第二指骨)、蹄骨(第三指骨)、腸骨、腿骨(寛骨)、坐骨、恥骨、股骨(大腿骨)、大転骨(大転子)、膝蓋、脚骨(脛骨)、腓骨(腓骨)、鉤骨(踵骨)、滑車骨(距骨)、後肢肢端は前肢と同じである。現在の解剖学用語に類似したものが多くみられる。

中国北京図書館蔵『司牧安驥集』については、お世話いただいた、茨城大学真柳誠教授、北京中国中医研究院鄭金生博士と北京中医药大学梁永宣講師に感謝の意を表す。

(横浜市)